

## 山形のふるさと工芸

-経済産業大臣指定伝統的工芸品-

やまがたのいもの  
山形鑄物

全国でいちやく国の伝統的工芸品指定を受けた山形鑄物。

その起源はおよそ950年前の平安時代に遡ります。

山形の豊かな風土が生み育てた  
「山形鑄物」950年の歴史

## 戦に従った職人が発見した山形の砂

山形鑄物の起源は、東北地方で前九年の役が起きた平安後期、源頼義軍と一緒に山形にきた鑄物職人が、馬見ヶ崎(まみがさき)川の砂や付近の土が鑄物の「型」に適することを発見し、この地に留まって鑄物づくりを始めたことによります。その後、斯波兼頼(しばかねより)が山形城を築いた南北朝時代に、金具を鑄物師に作らせた記録が残されており、当時から小さいながらも産地が形成されていたことがうかがえます。

## 最上義光による職人優遇策

江戸時代に入ると、山形城主の最上義光(よしあき)は、商工業の発達を目的に城下町を大きく再編。馬見ヶ崎川の北側に、火を扱う鍛冶町と銅町を置き、他の職人町と同様に人足役を免除して優遇しました。銅町の鑄物職人は、こうした土壤のもと、日用品や仏像を生産。出羽三山参りが全国的に流行すると、参拝者のお土産品として人気を博すようになり、産地の規模が拡大していきます。



写真協力:山形市産業歴史資料館

山形市内を流れる馬見ヶ崎川。鑄物の型はこの砂と現千歳公園付近の粘土を混ぜ合わせて作られました。ガスがたまず、膨張度が少ないなどの性質があったといえます。

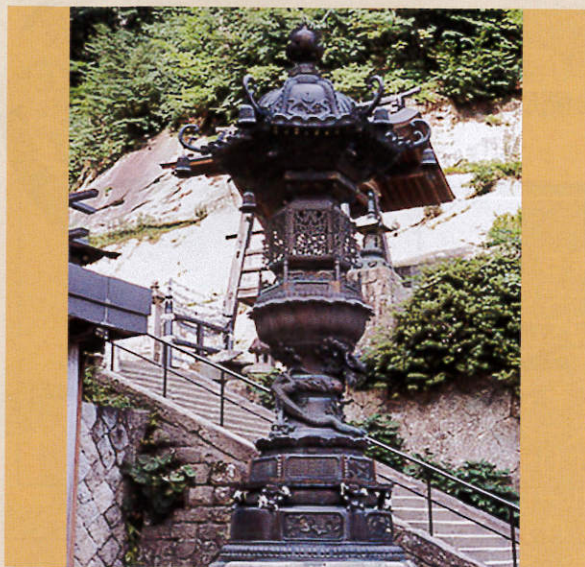
## 鑄造技術の発展

鍋釜などの日用品や仏像を生産する一方で、江戸中期には仏像・梵鐘・燈籠などの大きな鑄物を造る技術も確立しました。明治期に入ると、鉄瓶や茶の湯釜などの美術工芸品も作られるようになります。また、大正期以降は全国的に機械化が進んだことで、鑄造機械の分野が飛躍的に発展。銅町は、機械分野と工芸分野が同居する産地と変化しました。

## 銅町が産んだ鑄物の名工

こうした長い歴史の中で、山形鑄物のメッカ・銅町は多くの名工を輩出してきました。江戸中期における梵鐘の庄司清吉と佐藤金十郎、明治期における灯籠の名工・小野田才助、人間国宝となった茶の湯釜の高橋敬典(けいてん)など、各時代の職人たちは伝統に裏づけされた技術でそれぞれに山形鑄物の名声を高めてきました。なかでも茶釜や鉄瓶、花瓶、鉄鍋といった生活工芸品は、昭和50(1975)年に国の伝統的工芸品指定を受けています。

山形県ホームページ〈山形県ふるさと工芸品〉より



立石寺の金灯籠。明治28(1895)年に名工・小野田才助が鑄造しました。香川県の「金刀比羅宮」、宮城県金華山の「黄金山神社」にも小野田による名灯籠が残されています。

熟練された山形のけん玉職人の手で作り上げられた「日本けん玉協会」認定けん玉

楽しくあそびながら、脳の活性化、集中力やバランス力を養えます。

競技用 けん玉 **大空** 1,100円(税込)



お問い合わせは  
山形教育用品営業担当まで